

# 近世哲学研究

第 17 号

---

承認と和解  
——ヘーゲル社会哲学の二つの原理——

—— 竹島あゆみ 1

ライプニッツの創造論 (二)

—— 福谷 茂 34

---

2013

近世哲学会

## 編集後記

本年も本誌の刊行にあたっては編集実務に当たられた方々に大変な労力をご提供いただいた。貴重な研究時間を割いてくださったことにはただ感謝するほかはない。またご多用のなか玉稿をお寄せくださった竹島先生にも厚くお礼申し上げたいと思う。ささやかなものではあるが、質・量において研究論文らしいものを載せる場としての本誌を今後ともお支えくださるよう、会員をはじめ読者のみなさまにお願い申しあげる次第である。

電子ジャーナルという形態が生まれて、特にバックナンバーの検索が簡単になった。それを利用した新しい研究テーマが考えられるのではないかと思う。このところ私が興味を持って調べているのは、〈reviewerとしての哲学者たち〉というトピックである。

国際交流ということは応対にいとまがないくらい盛んだ。そのための資金もまたたくさん登場してきている。ところがそれと裏腹に意外に閉鎖的な傾向がみられる。英語圏の哲学に合わせるのが国際化みたいになつていてのではないか、という点は当然の疑問だが、同時にその種の資金が主として目的とするのはフォーラムやコンヴェンションの開催、外国渡航などである。たしかにこれこそかつてはもっとも欠けていたことなのだから、今ここにお金とエネルギーと時間が注ぎ込まれうる時代を迎えたことはめでたいことである。

しかしひるがえって、いわば原点である他国語の本を読むということはエンカレッジされているのだろうか。日本でも英米圏でも古典研究のためには英語だけでOKみたいになつていないだろうか。ところが一九世紀の終わりから二〇世紀の初めにかけての英語圏の哲学者たちはドイツ語の著書をよく読んでいた。ラッセルやブロードはマイノングの、ムーアはブレンターノの、ライルはハイデガーの著書を原語で読んで実に克明で内容豊富な書評を残している。ところがストロームソンはドイツ語が読めなかったという話を聞いたことがある。事実とすると、二〇世紀後半のカント研究に大きな影響を与えた人が英訳だけでやっていたことになるわけだ。これと比べて、二〇世紀初めの人たちはなんと謙虚だったのかと思わざるを得ない。少なくとも彼らのドイツ語哲学書の review もまた哲学上の国際交流の生々しい現場であることは間違いない。それどころか彼らの著書ではカットされていた事情も浮かび上がっている点では、研究を推進する力を持っていると思う。であるのにこれらの書評は(ライルのハイデガー書評を例外として)かれらの論文集には入れられておらず、*Mind* そのほかのバックナンバーのうちにはいわば埋もれていたのである。それが電子ジャーナル化のおかげで手軽に読めるようになった。ダメットの言う「アングロ・オーストリア哲学」という概念の現場としても、彼らが活発に行つた review を発掘し、活用することができるのではないだろうか。

(F)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

- 祝辞 酒井 修  
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦  
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——  
カントと初期フイヒテとの接点 北岡 武司  
義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄  
—— 功利主義との対比 ——  
仮象と反省 山脇 雅夫  
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——
- 第二号（一九九五）
- カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂  
—— 「世界」概念導入のための  
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論

早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた  
ヘーゲルの試み ——

工学はどういうタイプの学問か

齊藤 了文

信仰の情熱とその逆説

田中 一馬

—— キエルケゴール『おそれとおのき』  
におけるアブラハム解釈をめぐって ——

ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志

—— 意識の二義性と意識の転換 ——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫  
読書人世界から学者共和国制度へ

福田喜一郎

—— 理性を制度化しようとした  
カントの試み ——

デカルトにおける愛の区別について

武藤 整司

未済の人倫

石田あゆみ

—— 『精神の現象学』主奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

第四号（一九九七）

一本の綱 (Seil) としての人間 吉川 康夫

—— ニヒリズム状況下に於ける  
人間と社会の問題 ——

デカルトの懐疑について 安藤 正人

—— 『省察』の「反論と答弁」を  
資料として ——

市民と国家の媒介 小川 清次

—— 「国民」形成の側面 ——

『存在と時間』に於ける可能性概念の

多義性について 橋本 武志

自然主義的存在論の隘路 次田 憲和

—— フッサールの「領域的存在論」における  
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司

—— デカルト的行論の一考察 ——

デイルタイに於ける客観的精神の概念  
について

ハイデガーの他者論

折橋 康雄

安部 浩

### 第六号 (一九九九)

デカルトにおける《真理》と《存在》

倉田 隆

ヘーゲルの根拠論

山脇 雅夫

—— 知と存在との相即 ——

「第五省察」の隠された論理 次田 憲和

—— フッサール『デカルト的省察』における

「他者構成論」理解のための一視座 ——

シエリング哲学の出発点 浅沼 光樹

—— 人間的理性の起源と歴史の構成 ——

### 第七号 (二〇〇〇)

—— 菌田 坦教授 退官記念号 ——

菌田 坦教授 略歴・業績一覧

《講演》

近世哲学における神の問題

菌田 坦

近世哲学とはなにか 福谷 茂

—— 新しい哲学史像のために ——

人間の輪郭 武藤 整司

—— その曖昧さを擁護するために ——

知の自己吟味 山脇 雅夫

—— 『精神の現象学』緒論における

知と即自の区別について ——

ハイデッガーの良心論再考 橋本 武志

—— 可能性概念を手がかりに ——

生と音楽 折橋 康雄

—— デイルタイに於ける

生と音楽の時間性的問題をめぐって ——

### 第八号 (二〇〇二)

自由の軌跡 北岡 武司

—— 批判哲学における

自由の可能性の意味 ——

認識か解釈か 福谷 茂

—— 新しい哲学史像のために (二) ——

G・ハーマン 相対主義説の論理

歴史的理性の生成 田中 一馬

浅沼 光樹

—— シエリング『悪の起源』における  
神話解釈の意義 ——

《書評》

北岡武司著『カントと形而上学——物自体と

自由をめぐって』

橋本 武志

N・ケンプ・スミス著(山本冬樹訳)『カン

ト』純粋理性批判』註解』 長田 蔵人

### 第九号 (二〇〇二)

『存在と時間』と哲学の方法(形式的挙示  
再考) 田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生

榊原 哲也

ワイトゲンシュタインの「規則に従う」論

の若干の考察 子野日俊夫

復古のもとでの立憲主義 竹島あゆみ

—— ヘーゲル法哲学講義(ベルリン

一八一九/二〇年)の二つの講義録 ——

《書評》

ヤーコプ・ベーメ著(菌田坦訳)『アウロー

ラー 明け初める東天の紅』 福谷 茂

第一〇号 (二〇〇三)

十年の歩みを顧みて

藪田 坦

デカルトと自覚の問題

実川 敏夫

——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐる

高田 珠樹

——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節 (decorum) の意義

福田喜一郎

——クリスチャン・トマージウスにおける

法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」

西川小百合

——カントの道徳判断論の

新しい理解を目指して——

《書評》

福居 純著『デカルト研究』

浅沼 光樹

第一一号 (二〇〇四)

カントにおける崇高の経験

牧野 英二

イデオロギー批判の技術哲学 橋本 武志

——マルクーゼ・ハーバーマス論争を

手掛かりに——

感性の弁護 (Apologie für die Sinnlichkeit)

とは何か

長田 蔵人

——カントの「直観」概念の

見過ごされたアスペクト——

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

——その内実と意義——

千葉 清史

《書評》

武藤整司著『人間の輪郭——共生への理念』

吉川 康夫

第一二号 (二〇〇五)

形而上学的認識と超越論的認識

大橋容一郎

——カントと認識の形而上学・序論——

「この私」はなぜ謎を呼び起すのか

沖永 荘八

——私に付属する性質が消去された視点

からの考察——

反現象学の道

次田 憲和

——フランツ・布伦ターノにおける非超越

論的現象学と個体主義的存在論に基づく

直接実在論的認識論について——

超越論的反省とは何か

佐藤 慶太

——「反省概念の二義性」章の三段構造と

その意味——

第一三号 (二〇〇六)

根拠律批判から理性批判へ 石川 文康

——「ア・プリオリな総合」の起源を

めぐって——

ショーペンハウアーにおける「物自体とし

ての意志」概念の導入 多田 光宏

——意志の否定と道徳の両立のために——

《書評》

三つの『純粹理性批判』新訳 佐藤 慶太

第一四号 (二〇一〇)

ヒュームの認識論についての覚え書き

小林 道夫

——デカルトの認識論との対比において——

ライプニッツの創造論(一) 福谷 茂

無制約者と知的直観(二) 浅沼 光樹

——『テイマイオス註解』から『自我論』へ——

### 第一五号(二〇一一)

意志の無限後退論 久呉 高之

——ライルと意志理論——

歴史・時間・事実 福谷 茂

——哲学史研究のための予備的考察——

無制約者と知的直観(二) 浅沼 光樹

——『テイマイオス註解』から『自我論』へ——

### 第一六号(二〇一二)

カント倫理学における「方法の逆説」と人権の問題 御子柴 善之

叡知的性格における心術の唯一性と根源悪

福田 喜一郎

編集委員会

委員長  
委員

福谷 茂  
林 拓也  
太田 匡洋

## 執筆 者 紹 介

竹島あゆみ 岡山大学准教授

福谷 茂 京都大学教授

(執筆順)

近世哲学研究 第 17 号

2013 年 12 月 25 日 発行

編集・発行 近世哲学会  
編集代表 福谷 茂  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部  
西洋近世哲学史研究室内  
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>  
TEL (075) 753-2444

印刷所 大学生協京都事業連合  
ブックプリントセンター  
〒606-8106 京都市左京区高野玉岡町 23-3  
TEL (075) 711-3839

定価 1200 円(本体 1143 円)

STUDIES  
in  
MODERN PHILOSOPHY

No. 17

---

- Ayumi TAKESHIMA : Anerkennung und Versöhnung 1  
—— Zwei Prinzipien in Hegels Sozialphilosophie ——
- Shigeru FUKUTANI : Leibniz on the Creation of the World (2) 34

---

2013

Published by  
Society for the Researches  
in the History of Modern Philosophy